

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辭典

新裝刊
53卷

現代短歌分類辭典

新裝判
53卷

津
端
亨
編
纂

江苏工业学院图书馆
藏书章

現代短歌分類辞典

新装版53巻

通巻211

平成七年六月廿日発行

定価一七、四〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345

埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五

電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番

振替 東京三一九三二一四

(ISBN 4 - 87706 - 211 - 4)

目

次

目次

	歌数	頁数		歌数	頁数		歌数	頁数
まつたけ〔松茸〕	三八	一	まつばづえ〔松葉杖〕	二四	一九	まつわる〔纏わる〕	一	四九
まつたけがり〔松茸狩り〕	一	二	まつばば〔松馬場〕	一	二〇	まで〔迄〕	九〇	二四九
まつただなか〔真っ只中・真っ只中〕	一	二	まつばぼたん〔松葉牡丹〕	九四	二〇	ましてしばし〔待て暫し〕	一	七九
まつたん〔末端〕	六	二	まつばやし〔松林〕	一七〇	二三	ましてんろう〔摩天楼〕	六	七九
まっち〔マツチ〕	四八	二	まつばら〔松原〕	三六四	二七	まど〔窓〕	一三四	七九
まつち〔真土・眞土〕	二三	三	まつはれる	一	三六	まどい〔円居〕	四	一九
まっちばこ〔マツチ箱〕	三	四	まつはる	四	三六	まとう〔纏う〕	三	二〇
まっちゃ〔抹茶〕	七	四	まっぴら〔真っ平〕	一	三六	まどう〔惑う〕	四	二〇
まっちゃやま〔待乳山〕	六	四	まっびるま〔真っ昼間〕	九	三六	まどお〔間遠〕	五二	二〇
まってい〔末弟〕	一	五	まつぶさ〔委曲〕	一	三七	まどか〔円か〕	二三五	二二
まっと〔マツト〕	二	五	まつぶさに〔委曲に〕	四四	三七	まどかけ〔窓掛け〕	一〇	二八
まっとうする〔全うする〕	一	五	まっぽう〔末法〕	一二	三八	まどかに〔円〕	二	二八
まつーとしもーなく	一	五	まつぼくり〔松毬〕	三三	三八	まどがらす〔窓ガラス〕	二四	二八
まつなん〔末男〕	三	五	まつむし〔松虫〕	三二	三九	まどぐち〔窓口〕	八	二九
まつねん〔末年〕	一	五	まつむしそう〔松虫草〕	三二	四〇	まどべ〔窓辺〕	七二	三〇
まつのうち〔松の内〕	八	五	まつやに〔松脂〕	一九	四一	まどほ〔間遠〕	四四	三一
まつのは〔松の葉〕	二〇	五	まつめ〔松雀〕	四	四一	まとまり〔纏まり〕	三一	三三
まつのはな〔松の花〕	五二	二	まつよいぐさ	五	四二	まとまる〔纏まる〕	一	三四
まつのはな〔松の火〕	一二	二	まつり〔茉莉〕	五	四二	まとも〔真面〕	一九五	三四
まつゆき〔松の雪〕	一二	二	まつり〔祭り〕	一〇二	四二	まどもわぜる〔マドモアゼル〕	三	三九
まっは〔マツハ〕	一	三	まつりごと〔政〕	六二	四五	まどりーど〔マドリード〕	二	四〇
まつば〔松葉〕	二〇	三	まつりばやし〔祭り囃子〕	一	四七	まどれーぬ〔マドレーヌ〕	二	四〇
まつばがに〔松葉蟹〕	三	九	まつりゅう〔末流〕	一	四七	まどろす〔マドロス〕	二	四〇
まつばぎく〔松葉菊〕	七	九	まつる〔祭る・祀る〕	五〇	四七	まどろむ〔微睡〕	五三	四〇
まっばだか〔真っ裸〕	一	九	まつろ〔末路〕	一一	四九	まどわく〔窓枠〕	一三	四二

まとわる〔纏わる〕	一四二	まね〔真似・真似〕	八五・一七四	まぶか〔目深〕	五二二
まもん〔マトン〕	一四二	まねき〔マネキン〕	一二・一七六	まぶしい〔眩しい〕	八二二
まどんな〔マドンナ〕	三四二	まねく〔招く〕	八八・一七七	まぶしがる〔眩しがる〕	二二二
まないた〔組板〕	四四二	まねごと〔真似事・真似事〕	三一・一七九	まぶしげ〔眩しげ〕	一一・一三二
まなうら	二四三	まねし〔多〕	三一・一七九	まぶす〔塗す〕	三・一三三
まなか〔真中・真中〕	九九・一四三	まねる〔真似る・真似る〕	五・一七九	まぶた〔目蓋・瞼〕	六七・一三三
まなかい〔眼間〕	九一・四五	まのあたり〔目の当たり〕	二〇・一八〇	まふたつ〔真二つ・真二つ〕	一三・一三五
まなくときなく	二四六	まのて〔魔の手〕	二・一八三	まふゆ〔真冬・真冬〕	四〇・一三五
まなざし〔眼差し〕	一〇八・一四六	まはしら〔真柱・真柱〕	一一・一八四	まふゆび〔真冬日・真冬日〕	六・一三七
まなじり〔眦〕	三五・一四九	まはだか〔真裸・真裸〕	八二・一八四	まふらあ〔マフラ〕	九・一三七
まなする〔マナスル〕	二五〇	まばたき〔瞬き〕	四〇・一八六	まほ〔真帆・真帆〕	九・一三七
まなつ〔真夏〕	二九・一五〇	まばたきのひま〔瞬〕	一・一八七	まほう〔魔法〕	七・一三七
まなつび〔真夏日〕	一〇六・一五四	まばたく〔瞬く〕	二七・一八七	まほうびん〔魔法瓶〕	三・一三八
まなづる〔真名鶴・真鶴〕	一八・一五六	まばゆい〔目映い・眩い〕	四・一八八	まほし	一八・一三八
まなづる〔真鶴〕	一一・一五七	まばゆかる〔目映〕	一・一八八	まほら	四・一三三
まなづるみさき〔真鶴岬〕	一一・一五七	まばら〔疎ら〕	一八・一八九	まほる〔食〕	一・一三三
まなでし〔愛弟子〕	二・一五七	まばらまつ〔疎松〕	一・一九四	まぼろし〔幻〕	三四・一三三
まなびや〔学び舎〕	一九・一五七	まひ〔麻痺〕	二三・一九四	まま〔ママ〕	七・一四三
まなぶ〔学ぶ〕	八二・一五八	まひ〔眞日・眞日〕	二五・一九四	まま〔飯〕	一・一四四
まなぶた〔目蓋〕	七・一六〇	まひがし〔真東・眞東〕	二・二〇二	まま〔俤〕	一六七・一四四
まなむすめ〔愛娘〕	六・一六二	まびき〔間引き〕	九・二〇二	ままこのしりぬぐい〔継子の尻拭〕	一・一四九
まにま	一・一六三	まびく〔間引く〕	二・二〇二	ままごと〔飯事〕	一六・一四九
まにまに〔間に間に〕	三五・一六三	まひでる〔眞日照〕	三九・二〇二	ままならぬ〔俤ならぬ〕	一一・一五〇
まにら〔マニラ〕	一一・一七三	まひまひつぶり〔舞々蝶〕	一・二〇三	ままに	二四・一五〇
まにんげん〔真人間〕	一・一七三	まひのまさかり〔眞日眞盛〕	一・二〇三	ままはは〔継母〕	一一・一五九
まめかん〔マヌカン〕	二・一七三	まひる〔真昼・眞昼〕	五・二〇三	まみ〔目見〕	三六・一五九
まめけ〔間抜け〕	二・一七四	まひるび〔真昼日・眞昼陽〕	五・二二八	まみず〔真水・眞水〕	二・一六〇
まめるい〔間ぬるい〕	二・一七四	まひるま〔真昼間〕	一〇・一二九	まみゆ	一・一六一

まむき〔真向き・眞向き〕	一三二六	まゆげ〔眉毛〕	二五二九	まるがお〔丸顔〕	一三二
まむし〔蝮〕	二五二六	まゆじり〔眉尻〕	一二九八	まるがり〔丸刈り〕	二三二
まむしぐさ〔蝮草〕	五二六二	まゆずみ〔眉墨〕	二二二九	まるき〔丸木〕	一八三二
まめ〔肉刺〕	一〇二六二	まゆだま〔繭玉〕	四二九八	まるきばし〔丸木橋〕	一〇三三
まめ〔豆〕	二五四二六	まゆづき〔眉月〕	三二九九	まるきぶね〔丸木舟〕	二二一三
まめがき〔豆柿・君遷子〕	二二六九	まゆね〔眉根〕	三九二九九	まるくす〔マルクス〕	一七三三
まめかす〔豆粕〕	三二七〇	まゆみ〔真弓〕	一六三〇〇	まるごし〔丸腰〕	三三三四
まめがら〔豆がら・豆幹〕	九二七〇	まゆみ〔真弓〕	三三〇〇	まるざい〔丸材〕	五三三四
まめたん〔豆炭〕	六二七〇	まゆびきの	二二〇一	まるた〔丸太〕	五八三四
まめつ〔磨滅・摩滅〕	五二七〇	まいご〔迷い子〕	一三〇一	まるた〔マルタ〕	一三六
まめぶし〔豆ぶし〕	一二七〇	まよう〔迷う〕	三三〇一	まるだし〔丸出し〕	一三六
まめずた〔豆鳶〕	三二七〇	まよこ〔真横〕	二二〇一	まるち〔マルチ〕	一三六
まめまき〔豆蒔き・豆撒き〕	五二七一	まよなか〔真夜中・眞夜中〕	一九四三〇	まるで	一二三六
まめやか	一九二七一	まよびきの	一三〇七	まるてんじょう〔円天井・丸天井〕	三三七
まもなく	五〇二七二	まよびき	一三〇七	まるのうち〔丸の内〕	一八三七
まもの〔魔物〕	一二七三	まらうど〔客〕	三三〇七	まるのみ〔丸呑み〕	一三七
まもりぶくろ〔守り袋〕	一二七三	まらそん〔マラソン〕	五三〇七	まるばすみれ	二三七
まもりふだ〔守り札〕	一二七三	まらっか〔マラッカ〕	二二〇七	まるはだか〔丸裸〕	一三八
まもる〔目守る〕	二二七三	まらりあ〔マラリア〕	七三〇七	まるまげ〔丸鬚〕	一二三八
まもる〔守る〕	三三二二七	まらりあびょうしゃ〔マラリア病舎〕	一三〇八	まるまど〔円窓〕	四三八
まや〔馬屋〕	一四二八四	まらりあびょうとう〔マラリア病棟〕	一三〇八	まるまる〔丸丸〕	四三八
まや〔宿駅〕	一二八四	まり〔毬・鞠〕	九三三〇八	まるまると〔丸丸と〕	三三八
まやく〔麻薬〕	五二八四	まり〔余り〕	二二二〇	まるみ〔丸み〕	一〇三九
まやみ	一二八五	まりしてん〔摩利支天〕	二二二一	まるみえ〔丸見え〕	二三〇
まゆ〔眉〕	三四七二八	まりも〔毬藻〕	一五三一	まるむぎ〔丸麦〕	一三〇
まゆ〔繭〕	一〇〇二九四	まるい〔丸い〕	一一三一	まるめろ〔まるめろ〕	三三〇
まゆごもる〔繭ごもる〕	一〇二九七	まるい〔円い〕	五三二	まるめる〔丸める〕	一三〇
まゆくら〔繭倉〕	五二九七	まるおび〔丸帯〕	一三二	まるやけ〔丸焼け〕	一三〇

まれ〔希・稀〕	一四八	三二〇	まんがん〔万卷〕	八	三四二	まんしん〔満身〕	四	三六二
まれい〔マレー〕	九	三二四	まんがん〔満願〕	一	三四二	まんしん〔慢心〕	一	三六二
まれに〔希に・稀に〕	一一	三二五	まんかんしよく〔満艦飾〕	一	三四二	まんすい〔満水〕	三	三六二
まれまれ〔稀稀〕	八六	三二八	まんきつ〔満喫〕	一	三四二	まんせい〔慢性〕	二	三六三
まれら〔稀〕	一	三三一	まんぐろーぶ	一	三四二	まんぞく〔満足〕	一三	三六三
まろし	二	三三一	まんげきよう〔万華鏡〕	二	三四二	まんだら〔曼陀羅・曼荼羅〕	二六	三六四
まろにえ〔マロニエ〕	八	三三一	まんげつ〔満月〕	八二	三四二	まんだらくも〔曼陀羅雲〕	二	三六四
まろね〔丸寝〕	一一	三三一	まんご〔マンゴ〕	三	三四五	まんだらげ〔曼陀羅華・曼荼羅華〕	六	三六四
まろびね〔転寝〕	八	三三二	まんごすちん〔マンゴスチン〕	三	三四五	まんだん〔漫談〕	一	三六五
まろぶ〔転ぶ〕	六九	三三二	まんざ〔満座〕	二	三四五	まんだらどう〔曼陀羅堂〕	一	三六五
まろみ〔円み〕	三一	三三四	まんさい〔満載〕	一五	三四五	まんちょう〔満潮〕	四六	三六五
まろむ〔丸む〕	三	三三五	まんざい〔万歳・ばんざい〕	一〇五	三四五	まんてん〔満天〕	一七	三六六
まろやか〔円やか〕	二〇	三三五	まんざい〔漫才〕	四	三四九	まんてん〔満点〕	三	三六七
まろらか〔円らか〕	二	三三五	まんさく〔万作〕	一八	三四九	まんてんせい〔満天星〕	二五	三六七
まわす〔回す・廻す〕	二二	三三五	まんざら〔満更〕	二	三四九	まんと〔マント〕	二	三六七
まわた〔真綿・眞綿〕	一〇	三三六	まんざん〔満山〕	九	三五〇	まんどろ〔満堂〕	二	三六八
まわり〔周り〕	一三	三三六	まんじ〔卍〕	二	三五〇	まんとろ〔万灯〕	二二	三六八
まわる〔回る・廻る〕	八一	三三七	まんじゅう〔満州・満洲〕	一二	三五〇	まんどりん〔マンドリン〕	三	三六九
まん〔万〕	三〇	三三九	まんじゅう〔饅頭〕	三六	三五三	まんなか〔真ん中〕	二九	三六九
まんいち〔万一〕	一	三四〇	まんじゅういみん〔満州移民・満洲移民〕	一	三五四	まんにん〔万人〕	一二	三七〇
まんいん〔満員〕	一五	三四〇	まんじゅうこく〔満州国・満洲国〕	九	三五四	まんねりずむ〔マンネリズム〕	一	三七〇
まんいんでんしゃ〔満員電車〕	四	三四〇	まんじゅうば〔満州馬・満洲馬〕	二	三五四	まんねん〔万年〕	一一	三七〇
まんえん〔蔓延〕	一	三四〇	まんじゅうへん〔満州事変〕	二	三五五	まんねんすぎ〔万年杉〕	一	三七一
まんが〔漫画〕	八	三四〇	まんじゅうり〔満洲里〕	二	三五五	まんねんひつ〔万年筆〕	一五	三七一
まんかい〔満開〕	二二	三四一	まんじゅさん〔万寿山〕	一	三五五	まんねんゆき〔万年雪〕	三	三七一
まんがいち〔万が一〕	一	三四一	まんじゅしゃげ〔曼珠沙華〕	二五	三五五	まんねんれい〔満年齢〕	一	三七一
まんがえいが〔漫画映画〕	二	三四一	まんじよう〔満場〕	一	三六二	まんば〔万波〕	一	三七一
まんがか〔漫画家〕	一	三四二	まんしょん〔マンション〕	一	三六二	まんぶく〔満腹〕	一	三七一

まんべんなく〔満遍無く〕	一三七二	みあい〔見合い〕	一四三二	みかい〔未開〕	五四二
まんぼ〔漫步〕	一三七二	みあか〔水垢〕	一四三二	みかいけつ〔未解決〕	一四五二
まんぼ〔マンボ〕	一三七二	みあかし〔燈明〕	四九四三	みかいたく〔未開拓〕	一四五二
まんほうる〔マンホール〕	五三七二	みあげる〔見上げる〕	九四三四	みかいち〔未開地〕	一四五三
まんまく〔幔幕〕	四三七二	みいだす〔見出す〕	六四三四	みかえす〔見返す〕	五四三
まんまる〔真ん丸〕	一三七二	みいでら〔三井寺〕	二〇四三五	みかえりやなぎ〔見返り柳〕	一四五三
まんまるい〔真ん丸い〕	三三七三	みいら〔ミイラ〕	六四三五	みかえる〔見返る〕	一四五三
まんまん〔満満〕	二一三七三	みいる〔見入る〕	五七四三五	みがきたかまつ〔御垣高松〕	一四五三
まんまん〔漫漫〕	一三七三	みうごき〔身動き〕	一七四三七	みかく〔味覚〕	一四五三
まんめん〔満面〕	五三七三	みうち〔身内〕	四三三八	みがく〔磨く〕	五九四五四
まんもう〔満蒙〕	三三七四	みえ〔見栄・見得〕	一一四三九	みかげ〔御影〕	四二四五六
まんもく〔満目〕	六三七四	みえがくれ〔見え隠れ〕	一一四三九	みかげいし〔御影石〕	六四五七
まんもす〔マンモス〕	一三七四	みえすく〔見え透く〕	五四四〇	みかさ〔三笠〕	一五四五七
まんゆう〔漫遊〕	二三七四	みえつものとな	一四四〇	みかさかん〔三笠艦〕	三四五七
まんよう〔万葉〕	九二三七四	みえる〔見える〕	五一四四〇	みかさやま〔三笠山〕	七四五八
まんようがな〔万葉仮名〕	一三七七	みえわたる〔見え渡る〕	一七四四二	みかた〔味方〕	二六四五八
まんようしゅう〔万葉集〕	四一三七七	みお〔水脈・落〕	八九四四二	みかたがはら〔三方が原〕	一四五九
まんようびと〔万葉人〕	一五三七八	みおくり〔見送り〕	五三五四五	みかづき〔三日月〕	六五四五九
まんようしよくぶつ〔万葉植物〕	三三七八	みおくる〔見送る〕	七五四四七		
まんりょう〔万両〕	二三三七九	みおさめ〔見納め〕	四四四九	計	一五一四首
まんりょう〔満了〕	一三七九	みおつくし〔落標〕	一四四九		
まんるい〔満塁〕	二三三七九	みおとす〔見落とす〕	一四四九		
まんろく〔漫録〕	二三三七九	みおとり〔見劣り〕	三三四九		
み	一二三八〇	みおのまつばら〔三保の松原〕	三三四九		
み〔身〕	六三八〇	みおぼえ〔見覚え〕	三九四五〇		
み〔実〕	八四〇三八〇	みおも〔身重〕	七四五一		
み〔箕〕	七三三四〇九	みおろす〔見下ろす〕	三八四五一		
	一四四三二	みか〔甕〕	一四五二		

まつたけ【名詞】〔松茸〕

担子菌類ハラタケ目のきのこ。日本の代表的な食用きのこで全国に分布。秋、主としてアカマツ林に生える。傘は表面が淡黄褐色、初め半球形をなすがのち平開する。茎は十〜二〇センチメートル。肉は白色緻密で、独特の香りと風味が喜ばれる。

秋のもの栗松茸のいでしとふ朝霧たちて涼しきは何時

林 圭子

秋山に今日の日を得て遊行なす少しといふ松茸狩りに①

初井 しづ枝

秋山の水のかをりか松茸のおのれ香を吐くその生肌に②

岡崎 義恵

朝々と山包む霧濃くなりて松茸も漸く終りとなりぬ②

藤原 東川

朝ぐり、松茸のにはひさせて、ゆきちがひにものをいふ村人④

米田 雄一郎

妹が松茸とりて来ぬうちにわれは貰ひし松茸を食べる①

清水 比庵

弟の妻あるじのゐぬをくやみつつにぎはふ卓に松茸かをる①

川浪 磐根

大き小さきあまた松茸つらぬきてちぎれるばかりその薄の穂①

山下 陸奥

秋の山憩はむとして眼の下にわれとおどろく松茸ひとつ（夜明け空）

岡野 直七郎

一つひきわが眼うつせば松茸のまた一つあり落葉の中に（夜明け空）

岡野 直七郎

屈む背に露ひややかに降りにけり匂ふ松茸採るがうれしく

松村 英一

（山の井）

しめやかにとる秋の灯吸物の松茸の碗の汁にはふなり（田畑）

伊藤 豊

薫りなき柿と味なき松茸と籠に盛られてわれに写さる②

岡崎 義恵

かの山の土のつきたる松茸のいろ新しき見つつ悲しき

矢代 東村

京都よりの松茸の香たかくして北山あたり歩かんと思ふ④

原 三郎

故里を偲べと添へる新木箱香の漂ひて松茸あらはる⑬

窪田 空穂

齒朶の葉に埋められたる松茸の笠のいたみををしみつついだす③

松田 常憲

ずつしり濡れて帰る山の小道でむくりむくり辭わつて出た松茸を
抜く④

米田 雄一郎

賜りし松茸焼けば思はるる術後をひとり旅する夫の

上山 幸子

たらちねの母が生まれしふるさとのしめじ松茸乳の香ぞする⑨

太田 水穂

丹波松茸あをだいたいも添ひて来ぬ夏より失せし味覚を返せ③

川浪 磐根

亡き父のかつてをしへし松茸の生處をここと求め来ぬわれは⑤

岡野 直七郎

荷をあけて盆にならべし松茸に詰籠の松葉の青く着けるも②

臼井 大翼

日だまりの朽葉のひまににほひつつこの松茸のありけんものを③

松田 常憲

一つひきわが眼うつせば松茸のまた一つあり落葉の中に⑤

岡野 直七郎

一箱の松茸が香をみなぎらす厨ゆたかに今日こそあらめ⑩

松村 英一

松茸にもみぢ折りそへゆく人にまたもあひけり秋の山みち②

明治 天皇

松茸のあつき土瓶蒸にはひ立つ汁のうまさを愛しみつつ吸ふ②

森園 天涙

松茸のかさひらきしを持ち来りわびこといふは素直の人ぞ（冬空）

岡 麓

松茸のかをりすがやかにあるものを心むなくかくて日のたつ⑦

矢代 東村

松だけのテレビ見し夕べなり夢みや信濃の松茸とどく⑦

四賀 光子

松茸をおほく通せば山すき先きの結びのはや堪へざらむ①

山下 陸奥

松茸をとりてくる妹松茸を食べては待つに松茸売りに来る①

清水 比庵

松茸をひくと来りてこの山の秋草露にしとど濡れたる⑤

岡野 直七郎

松茸を火鉢に焼きて夕餉すと柚子を擦せば柚子の香も立つ

依田 秋圃

松山のこぼれ松葉のうすじめり搔けば並べり松茸のあたま①

神原 克重

行きずりに吾が下げ持てる松茸の香りを言ひて振り向く人あり

坂本 義夫

（新萬葉集四）

湯気の立つ小碗の汁に松茸の切口白く匂ふ夕ぐれ⑫

尾上 柴舟

まつたけがり【名詞】〔松茸狩り〕

秋山に今日の目を得て遊行なす少しといひふ松茸狩りに①

初井 しづ枝

まつただなか【名詞】〔真っ只中・眞っ只中〕

① まんなか。「ー」に浮かぶ島」② まっさいちゅう。

新宿駅のなだれる群衆のまつただなかにゐてはつきりおのれを意

前田 夕暮

識する⑩

まつたん【名詞】〔末端〕

組織などの中枢から遠く離れた部分。下部。

繊維産業構造改善の試案あり末端におよぶ政策はいつ①

寺門 一郎

トラックが山積したる青竹の末端は地を擦りつつぞゆく⑤

西田 嵐翠

枕上窓のよろひ戸あかつきの樹海の風の末端に鳴る

與謝野 晶子

末端のわれらは何も考へず兵器ひたすらつくれと言ふか①

三浦 武

山稜鋭くゆふべの空にそそりたり氷河の末端を思ひおこさしむ⑩

前田 夕暮

わが足のその末端に著かむまで此の息続け続けこの息⑤

尾上 柴舟

まっち【名詞】〔マッチ〕

摩擦によって発火する薬剤を細い軸木の先端につけた発火具。現在、普通に用いられる安全マッチは、パラフィンを塗った軸木の先端の頭薬（塩素酸カリウム・硫黄など）を、容器の側板に塗布した側薬（赤燐・硫化アンチモンなど）にこすって発火させる。

あなあはれ寂しき人の浅草のくらき小路にマッチ擦りたり②

斎藤 茂吉

筏の上渡りてどこまでもゆく人ら沖にしやがみてマッチすりたる

隅田 葉吉

②

いくたびかパイプに火をば移さむと擦るマッチ燃ゆ赤き炎に⑦

宮 柊二

うづたかき落葉のそばにかがまりてさ霧のなかにマッチすりたり

土田 耕平

③（現代短歌大系）

海辺より軒一様に暗き街たばこのマッチ買ひて歩めり④（角川文庫）

近藤 芳美

海よりあがり来てまづぬれ手にて取りあげぬ焼砂の上のバットと

竹添 履信

マッチ①

思はしく仕上りゆく細めし眼マッチする間も画面を離れぬ①

山田 百合子

河岸倉のまへの浅夜にゐるひとりマッチすりたればその火が赤し

遠山 光栄

風ありて幾たびとなく線香にマッチ擦る妻よ遠く来しかも⑥

岡野 直七郎

風さむく渚吹く中みづからの身にかばひつつマッチを擦るも①

磯 幾造

体ぢゆうが空になりしごと楽にして途中靴墨とマッチとを買ふ⑤

斎藤 茂吉

川土手のあをき草生に腰おろしマッチのなくて煙草が喫へぬ⑤

長谷川 銀作

黄いろいベレーとワンピースの紅さはまるで黄燐マッチだ春だ四

前田 夕暮

月だ球拾ひの少女たち⑨

大野 誠夫

菊にほふ車に寄る恋もしづかにて夜がふけゆけばマッチ売くる①

大野 誠夫

喫茶マッチの広告意匠さまさまにぬくめく置く一隅をもちて夜更

鐸 静枝

かす③

黄に染めてマッチの軸木干してあり細かにほそき島のなりはひ④

四賀 光子

くらやみの空のなかよりマッチ擦り顔は見えつも我が妻の顔③

島木 赤彦

広告マッチこの巧みな植物園に火をつける④

清水 信

午後三時蚊遣りの香にマツチ擦るわが平安をさびしとおもふ⑤	吉野秀雄
この夏の旅に貰ひしマツチ一つわがポケットにいつまでもあり①	松井如流
四方の音絶えたる夜半にマツチすり煙草に移す短き焰⑤	植松寿樹
遮断機に通過貨車待つ時長くポケットのマツチ箱にぎりつぶしけり①	立花馨
しらじらと硫黄マツチがくすぶりて炎たつるまでにやや間あり④	長沢美津
線香にうつすためマツチを擦るひとり山の平に低き風たち⑤	遠山光栄
線香をつけむマツチの炎消ゆこのひたごころ遮るや風②	鈴鹿俊子
そとの酒暫く飲まずマツチがなく煙草喫ふのにマツチを買ひぬ⑦	長谷川銀作
たどたと人の煙草にマツチ擦るいつかいやしき吾が厭はし煙草つけしマツチの棒の燃えつきて、黒くなるまで、見てゐたるのみ⑤	榎本美佐夫
	渡辺順三
西日さし部屋のなかとも思ほえぬ机の上のマツチ擦りたり①	佐藤佐太郎
灰皿の中にてつひに燃え尽きしマツチの軸が形を残す⑤	植松寿樹
墓を楯にすりしマツチを線香につけむとしては疾風に消ゆ③	鈴木光子
火を出せど柚木にもゑぬ小さき燐寸、景物のマツチの心もとなき③	西村陽吉
火をつけて焼けばこの蟲もえさしのマツチの軸を抱いて死にけり灯をとすマツチたづねていやせかるる口に血しほは満ちてせかるる	清水恒子
ふいに火がついたやうにはしゃぎ出す黄燐マツチの少女達だ明る	松倉米吉
い朝の光だ	前田夕暮

巻タバコにくはえてマツチするその瞬間もこころ張りゐる⑤	渡辺順三
マツチすりて青き焰の立つときに顔突き出して喫ひ去りゆく女⑥	鹿兒島壽藏
マツチ擦りて燦らす蚊遣香われのみの刻が机に展かるる夜③	鐸静枝
マツチ点けたまゆら顔の明からむ煙を吐きてひとり息づく⑤	高田浪吉
マツチの軸さしこみて掻く耳の中少し腫れゐる今日あたま重し⑤	西田嵐翠
マツチ・炭手に入りがたきこの冬のきびしさに我等堪へてしゆかむ	清水乙女

マツチ二三本もてばにぎやかなこの触感よ枯草をもやす④	清水信
マツチ一つふと燃やしみぬ小さ炎まろくかそけく燃えうつりゆく	上山幸子
眼の前にマツチがありて灰皿の煙草を拾ひわれ喫はむとす③	長谷川銀作
持ちあぐね萎ゆる思ひとなりしとき磨れるマツチの幾度か点かず⑥	斎藤史

元將軍擦りしマツチの瞬間燃え移りゆき枯草を這ふA4③	井戸川美和子
宿住い寂しと言はむ位置変へず煙草もマツチも朝のままあり(多層三)	吉川義明

わが擦れるマツチよりつけし煙草火を子は胸底に吸ひて煙吐く①	初井しづ枝
-------------------------------	-------

まつち【名詞】「真土・真土」

耕作に適する良質の土。

あさがほの花ゆらげばむらさきの露こぼれたり真土のうへに①	豊島逸水
宇陀の野の赤き真土のそこひより今堀り出でし剣ひとふり	中村美子
上白む真土の道を歩むさへつぎほなくわが恋しかるかな④	高橋英子
崖なせる下の窪地に並ぶ墓おほかたは小さし黒き真土に②	森園天涙

かげろひの春の真土に庭つ鳥かける遊べり白梅の花④	高橋英子
風もなき露地の真土の月明り吾庭の樹を外より見上ぐ(新万葉集三)	小池一蘆
からみあひ組みあへる根に鍬打ちて笹の真土の世界を崩す⑫	尾上柴舟
玄土は真土ならねば水入れて深くぬめるなし早稲田根づかず	北原白秋
しっとり真土ぬらして久方の雨なり今朝を春の雨なり①	萱沼利子
しみじみと朝空あふぎ立ちつくす夏の真土の冷たきうへに	若山牧水
その日向冬の真土にある影の著きは梅の幾枝にして⑩	北原白秋
ただよひて船は着きたりはひいでて陸の真土にいばりしにけり②	中川與一
ながき冬を雪にこもれば乾きたる真土踏みたくなりけるかも	結城哀草果
流れわび山の真土のたまるらしこの川淀の濁深しも⑦	尾上柴舟
軒かげは乾く真土に堀り並めてすりばちの穴も古りきに(多磨三)	西野一良
墓穴の底の真土を掻き上げて冷えたつ香あり命にぞしむ⑥	若林牧春
日盛の真土に観れば風しばしば光となりて散る木の葉あり	中村要
人と馬と黙々として山峽に命さびしく真土をかへせり(新萬葉集三)	近藤きよみ
日盛の真土に観れば風しばしば光となりて散る木の葉あり②	中村要
(多磨二)	
冬深き眞土ふくらむめり清々と丘一めんの大根の畑	尾山篤二郎
ほのぬくみ明る真土や追ひぬけて鼠見はなち猫のころぶす	北原白秋
堀り拓す真土の中の萱の根は水しぶくもよ陽に放る時②	穂積忠
(現代短歌大系)	
みささぎに近づきがたき心もて真土の上に足あつつけぬ①	森山汀川

まっちばこ【名詞】「マッチ箱」

遮断機に通過貨車待つ時長くポケットのマッチ箱にぎりつぶしけり①	立花馨
マッチ箱に装填されるマルチシズム安易な燃焼を誰もがさせてゐる④	清水信
まっち箱をひっくりかへして児はあそぶそこらいったいまっちの雨だ①	清水信

まっちや【名詞】「抹茶」

茶の新芽を摘み、蒸したのち乾燥させて茶臼でひいたもの。湯を加えて茶釜でかきまぜて飲む。

桜の葉に盛られし干菓子いただきて一時を待つ抹茶の点前⑥	朝吹磯子
食膳にいだす抹茶を京らしと若き日の妻手にまはし飲む⑮	松村英一
髭しろくなりける君と八階の食堂に抹茶のむはよろしも①	藤森朋夫
抹茶十匁百円の値を笑ひて言ふ店のあるじと馴染のわれと①	初井しづ枝
抹茶一つよばれてころなごみをり巷の音のここまでは来ず(近江坂)	萩原よし江
抹茶飲み草の葉食みて生きをりと事無げに笑む病ながき君⑩	窪田空穂
焼跡にひとつ残りし緑なる抹茶に腕をいかにかもせむ②	岡崎義恵

まっちやま【名詞】「待乳山」

①奈良県五条市と和歌山県橋本市との境にある山。紀ノ川(吉野川)に臨む。(歌枕)②東京都台東区浅草にある小丘。隅田川に臨み、上野の台地に続く。待乳山聖天堂がある。

川ぞひは心あかるし待乳山月を背にしていまのぼりくる	生田蝶介
けふやくるあすはくるやと待乳山まちつくらす日こそ長けれ①	正岡子規

隅田川すめばこそあれ待乳山かたぶく月のかげもやどれり①
戸田茂睡入道恭光の歌碑ひとつ恋ひ来て見たり待乳山の上①④
夏がすみ千住通ひの船窓に見えておぼろの待乳山の森④
待乳山宵月待てば君のせて舟は竹屋をはなれしけはひ③

福田 行 誠
松 村 英 一
太 田 水 穂
金 子 薫 園

まってい【名詞】〔末弟〕

末弟とその子の二人農大卒へ生家護るを褒めやりぬ吾は⑭

原 三 郎

まっと【名詞】〔マット〕

①玄関や入口などに置く泥落とし用の敷物。②床や廊下などに敷く敷物。③体操などで用いる。

眞下は黄色い枯草のマット赤い吹き流しが鮮かにある⑨
マットを朝の舗道にたたきをりたちまち風に埃が疾し②

前 田 夕 暮
平 野 宣 紀

まっとうする【動詞サ変】〔全うする〕

「「まったくする」の転」①完全に終わらせる。完全に成し遂げる。②完全な状態に保つ。完全にする。

この壕に命全うする人のあれと掘りけむ学徒思ほゆ①

窪 田 章 一 郎

まつーとしもーなく【句】

シは緊張、モは軽い詠歌の助詞。待つとなくと同じ。待つといふわけでもなく、の意。

いりゆける雲がくり日はいまだいはず待つとしもなくいこひてゐるも

木下利玄

まつなん【名詞】〔末男〕

一番下のむすこ。すえの男の子。

末男の子ひとり為すまで為すまでといひゐていひし如くなりつる⑥
中学にて着なれ古びし小倉服着て末男は東都へ立ちぬ①
何言ひてもただにこにこと末男はたはけに似たれ尚し愛しも①

鈴木 康 文
中 井 コ ッ フ
中 井 コ ッ フ

まつねん【名詞】〔末年〕

①ある時代の最後の年。

安らなる末年希ふそのみに今を生くとぞ人富み足りて④

千 代 国 一

まつのうち【名詞】〔松の内〕

正月の松飾りのある間。元旦から七日。あるいは一五日まで。

幾度か尿洩らす母のむつき替へ洗ひ干しつつ松の内過ぐ①
かりそめに松の内よりうち臥して帰らず母のなりたまひける①
寒に入るさむさつよけれ松の内人のにぎはひにうら和むかも⑪
参宮をおもひすてたるくやしさに松の内の日は静かに静れぬ②
障子あけて細目にわれにものを言ふ松の内なる人うやうやし⑧
何事もなく松の内過ぎたりし家にこもりて抱負もあらず①
松の内の客も済みつつこの年の吾がやすらぎはいまだ挽れず②
町の家松の内なる四五人に眺めらちれてゐる女の踊り③

坂 井 菊 枝
橋 宗 利
今 井 邦 子
白 井 大 翼
太 田 水 穂
寺 門 一 郎
白 井 大 翼
島 木 赤 彦

まつのは【名詞】〔松の葉〕

①松の木の葉。まつば。

あかあかと空に日は照り松の葉の光こまかなり昼を酒くむ
あかねさす晝のひなたに松の葉の散りくる音の幽そかに聞ゆ

前 田 夕 暮
中 川 與 一

秋暑く松の葉のみどりくろずめり妻に縋りて家跡めぐれば①

伊藤 保

秋雨の雫を落すたけ高き松の葉青しもみぢのなかに⑦

今井 邦子

秋といへば譬へば繁き松の葉の細く遍く立ちわたるめり

長塚 節

秋の香のたよりも今かわが宿の松の葉ぬらし小雨そぼふる

高崎 正風

朝霧のたちこむる中に松の葉の雫笹原に落ちつぐしづけさ

平田 昌文

朝涼の縁のはしゐの寂かなり廂にあたる松の葉の音

吉植 庄亮

朝の日は苔の上にさし松の葉も白き花びらも露かわきゆく⑧

土屋 文明

朝晴れや松の葉竝の細々と照り弾きつつそよぐともなき

中端 盈二郎

あたらしき船歌かなし松の葉の琉球組の歌のごとくに①

吉井 勇

暑き日のさせる朝戸よ路地の上に青き松の葉散れる静けさ

土屋 文明

四阿亭の卓に散りたまる松の葉を払ひたまへりその大き手に②

山下 陸奥

(新萬葉集八)

荒草に昼をけ残る露ありてはらりはらりとちるは松の葉③

松田 常憲

あらし吹く峯の上の松の葉をしげみ鴉にやあらむ羽ばたける見ゆ

菊池 知勇

②

嵐ふくやまぢをゆけば松の葉も紅葉と共にみだれてぞちる①

明治 天皇

あらたまの年とはなりぬ吾が庭の松の葉ならし朝風わたる②

久保田 不二子

新玉の年ほぎ酒の酔さめに松の葉うれの雪払ひけり④

窪田 空穂

いけ水にうつろふかげは緑にて松の葉しろく雪ふりにけ

柳原 愛子

(新年御歌会始)

柳原 愛子

伊豆の山むら立つ松の葉の上にあなまばゆしや朝日子の海

菊池 知勇

磯山にかはらぬ海の音ききて昔の人と切る松の葉よ(伶人)

土岐 善麿

いつくしや君のまつ毛のおんなみだ松の葉末の露のごとしも①

福田 夕咲

いはりの屋根におちたまりたる松の葉のしろく乾きてさす日淡しも②

橋田 東声

いましがた過ぎし時雨の散らしけむ御墓にかかる青き松の葉①

加藤 洵綾

今しばしかくてもみばや遠山の松の葉ごしの秋の夜の月①

昭憲 皇太后

うち対ふこころ堪へぬを松の葉のいたみに寄せてはつか言ひにし

鈴木 英夫

(多磨一)

海の音夜を離れて磯山の松の葉さやぎ日はいでむとす①

服部 躬治

小瀬溪にちの松山はつづくといふ松の葉ひかりどこまでも松の山

片山 広子

(新萬葉集二)

音もなくわきてはたまる水の面に松の葉ごしの雲もうつれり

秩父宮妃勢津子

(新年御歌会始)

おとろへず暑き西日は差しをりて松の葉むらのががやけるみゆ④

高田 浪吉

思ひなしか書院の庭の松の葉もいたく寂し昏れにけるかも

橋田 東声

(地懐以後)

かくのごと散る松の葉もありつらむくびさしのべてうたれたりけ

松田 常憲

③

風をりをり磯のかすみにはさはるらむ松の葉ちれりあづまやの上に

與謝野 寛

⑤

傾きて松の葉にさす夕日かげ細葉の揺れの目につきにけり

林 圭子

(新萬葉集六)

片寄りに吹きよせらるる松の葉にまじりて蟻の十まりうごく①

吉植 庄亮

学校の庭より出づるトラックに青き松の葉積みあふれたり①
神苑の秋も深しと仰ぎ居て光細かに散り繁く松の葉(多磨二)

田中 四郎
山本 光一

硝子扉の松の葉さきのひかりより身にしくしくとさしくさむさ

岡 稻里

②

かれ枝にふりしはとけて松の葉のしげみにのこるけさの雪かな①

明治 天皇

木原山阻ぎて降りつく松の葉は庭に廂にひと日あかるし②

臼井 大翼

敵しかる年のはじめに先づ申す千代松の葉のめでたき寿言⑨

太田 水穂

霧去れば日のさし来り鳶のなくいだき松の葉のさやに見ゆ

尾上 柴舟

(間歩集)

霧すぎてから松の葉の針ごとに滴る涙より山冷えてゆく⑬

與謝野 寛

けふもまた解けはてずして凍りゆく雪のおもてに散れる松の葉①

三ヶ島 葭子

木枯の風にもちらでわが庭の松の葉しろくこほる霜かな①

昭憲 皇太后

木枯のひと夜さ荒れし沍て土にここだこぼれて青き松の葉

村野 次郎

苔白き石のきざはし松の葉の乱れ降り来り昼ぞすずしき⑨

尾上 柴舟

苔むせるみ祖^みの墓に松の葉をこぼして風の明るく過ぎつ

村野 次郎

心渴きて汝^{なれ}とある部屋の窓のそと風に鳴りつつ光る松の葉④

安田 章生

この朝け野分に散れる松の葉の青きがすずし濡れ石の上に

吉植 庄亮

このあした野分に散れる松の葉の青きがすずし濡れ石の上に②

吉植 庄亮

(新萬葉集九)

この庭の松の葉いろにさすあさ日石にひびきて鶯の鳴く⑤

太田 水穂

こまかに松の葉散り浮き昼さへも小波さむき大沢の池(草薙)

尾山 篤二郎

こまやかに降れる雪かも松の葉の針葉やうやくに雪をとめたり③

杉浦 翠子

こんこんと湧きてあふるる山清水いま落ちし松の葉を流しつつ④

太田 水穂

昨夜の間に雨ふりたらむ砂庭はあかときにして松の葉の梅雨

中村 憲吉

さくら咲く庭戸ゆれども松の葉のきらめくみどりは艶めきにけり

宇都野 研

さ庭べの松の葉に置く白露の玉吹き散らす上野る嵐①

正岡 子規

さ夜ふけに白露むすぶ松の葉のこまやかにして秋ふかむらし

河野 慎吾

静かなる庭ぞとおもふたまゆらを冬日に散らふ松の葉のあり④

松田 常憲

しづこころ人に侍りて時すぎぬ松の葉もれて草にのこる陽②

北見 志保子

芝も刈り松の葉刈りもすませたり秋の日和の親しみ深し⑥

川田 順

白菊の花にこぼれし松の葉の二すぢ三すぢ子はひろひろつ⑤

松田 常憲

すずしくも吹く夕風にちりにけり軒の松の葉眼には見えつつ②

吉植 庄亮

砂山のときをり光る松の葉にかもめなるらし腹すりて行く⑥

前田 夕暮

住吉の松の葉しぬぎ降る雨の降足りて今は充ちに溢るる①

植松 寿樹

仙酔の島山松の葉をてらし出づる月かげに君といつ見む①

蕨 真

戦友の寝息わが息に通ふ時ありて松の葉しきり廂合に散る

竹 仲 智

(多磨三)

空たかきなみのひびきをききながら松の葉はらふ神のみやびと①

井上 通泰

泰山木の浄き蕾は白たまの真玉か松の葉をうつしをり①

吉野 秀雄

(現代短歌全集・角川文庫)

大泉池のみぎはの松がおのづからこぼす松の葉静けかりけり

松村 英一

(全歌集)

たかねよりおろす嵐は松の葉のちらぬ日もなき山かげの庭

昭憲 皇太后

高嶺よりおろす嵐に松の葉のちらぬ日もなき山かげの庭①

昭憲 皇太后

玉滝のたぎつひびきは風となりて岩の上の松の葉にふきかくる④
露とのみ秋はかぎりず松の葉をわたる風にも袖はぬれけり
時じくに松の葉こぼれらる苑の日かげはややにうつりめぐりぬ

(碧潮)
岡崎 義恵

ときはなるものと思ひし松の葉もちらぬ日ぞなき冬枯の庭①
明治 天皇

床の上にふと松の葉を見つれたり秋風の日のその青き松葉
岩谷 莫哀

(新万葉集一)
尾山 篤二郎

年老いて枯れたる松の葉なき枝をあな細やと仰ぎたりけり⑩
神原 克重

年の寂びその太幹に見せながら松の葉むらのいよ薄きみどり①
石井 直三郎

戸に散るは松の葉ならむ月の夜の野分のかぜはかすかなるかも
島木 赤彦

土用もなか二日刈りたる松の葉の青き葉庭に厚くたまりつ③
宮 柊二

南常陸松の葉寒き丘を越えてあかつき近き湖の面見き
高田 浪吉

二階よりただちに見ゆる松の葉のいろやはらかし暑きこのごろを
松田 常憲

②
庭くまに咲きおくれたるつはぶきに散りかかりたる松の葉のあり
中村 美穂

庭さきの松の葉こまかに露もちて眞晝明るく雨はれにけり①
小宮 良太郎

庭隅に青さをたもつ松の葉にうす日さしそひ照りこまかなる
正岡 子規

(山鏡)
庭中の松の葉におく白露の今か落ちんと見れども落ちず①
山下 陸奥

(新萬葉集七)
額づける間だに散りくる松の葉にうつし身埋りゆくかと思ふ③

ねつつ見るがらす戸越しの松の葉はさ渡る雲をそがひに持つも②
橋立に渡る木の橋夕風に鳴りたつ松の葉を散らしきて④
鈴木 康文

鳥つきて松の葉の間に湖の光りつめたく暮れそめしかも①
山下 秀之助

初夏の風に松の葉ふりかかる庭の白砂淨く乾けり②(角川文庫)
吉野 秀雄

林には起き伏しありて冬長く松の葉などの溜る一くぼ②
隅田 葉吉

はらはらと散るは松の葉石の面にこぼれて溜るひそけさも見つ
松田 常憲

(秋風抄)
春雨のしめりさやけき白砂に青き松の葉ちりてかぎりなき②
吉植 庄亮

春のあらしすぎしなごりの松の葉に光しづけき朝づく日かも
村野 次郎

春のあらし明るく吹きて松の葉のこぼれてあたるここの障子に④
村野 次郎

万代のためしとぞ見る松の葉の上につもれる九重のゆき①
明治 天皇

ひさし深く松の葉越しの朝かげにめざめしをけふのひと時とする
土岐 善麿

②⑥
ひつそりと青松の葉にとまる蛾の夕暮早く門しめにゆく③
四賀 光子

ひとときの夜露はしづみ一山は松の葉むらにけむる月かげ⑤
長谷川 銀作

太陽の在処雨ふる空にあかるめり松の葉末の露ひかりかも②
木下 利玄

日の暮れていや青みゆく松山の松の葉のいろをさむしがりけん④
太田 水穂

ひもすがら疊りし空のゆふまけて松の葉に降る雨となりたり②
橋田 東声

(地懐以後)
日をいく日氷の上に散りつぎて松の葉はあはれ色もにははず
鐸木 孝

(新萬葉集四)
深緑勢ひ叢立つ松の葉の芯の太芽はいまだ短し③
若林 牧春

ふゆがれのこずゑはいまだつもらねど松の葉しろきけさの初ゆき
 冬すぎて春来し山の杉木むら霜枯れてあかく松の葉は青し⑧
 冬園の芝にかたむく松の葉の尖りはふかく海を刺しをり(火山系)
 冬なぎし松山浅きしら砂に松の葉降るはあかるかりけり②
 冬に入る庭の手入れに松の葉の枯葉払ひて実なほす枝ぶり③
 冬の日に通きては見ゆる松の葉の、あな冷たくも尖りたるかな。

④

冬の日に光りては散る松の葉の幽かに人はすみはてにけり

(秋風抄)

冬の夜の光もこほる月かげに松の葉しろくてりまさりける①

降る雪を雫とこぼす松の葉のきららぎてすがし一樹のひかり③

ほろほろと啼くは山鳩さしぐめるひとみに青し木の間松の葉④

松の葉が風にあまえてこぼれ散るるべ落しに暮れる山の陽①

松の葉刈すみてあかるき庭石に暑き秋の日の暮るるまで射す①

松の葉に雨が細かく降る中を夕陽が時時さしてくるなり

松の葉に生のいのちの漲りてあたたかきかな林に入れば⑧

松の葉にかかりて消ゆる朝霧を見つつさびしむひとり心に

松の葉に風のそよげばこまやかに金砂降るなりきさらぎ眞昼③

松の葉に黄の幼蟲がむらがれりいかなる蛾にかならむとすらむ

(小園)

松の葉に雲おりきたる雨の日の九里陵の道を来しといふかや④

松の葉にセメント工場の灰白し友の肩にもはつかに白し③

岩倉具視	高田浪吉	久方寿満子	臼井大翼	杉浦翠子	窪田空穂	松田常憲	明治天皇	長沢美津	若山牧水	清水信	大村呉樓	清水恒子	金子薫園	中村美穂	九條武子	斎藤茂吉	太田水穂	植松寿樹
------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------

松の葉に照る月さむし白坂の峠のあたまを吾がひとりくだる①
 松の葉に鳴る風をよみ眞下より仰ぎて立てば梢高しも②
 松の葉に鉄を入るる久しくて西日射したりどうだんつつじ③
 松の葉にまつはる日ぐれの陽のいろをねながら仰ぐ家はみな留守

①

松の葉に松の鱗にしたたれる日はひややかにわが足に落つ①

松の葉に雪ふりかかりふりつもり形をかへてゆくおもしろさ②

松の葉に夕日まばゆくさしながら昨日には似ぬ風のさまかな

松の葉にをりふし光さわだつはありなしの風の来て遊ぶなり⑩

松の葉の青きながらの枝組のややこけし影は石の上にあり②

(山鏡)

松の葉の青きも散れり昼寝して時ありし間に時雨れたりけむ①

松の葉の青さに照りてゆらゆらと提灯のゆく御溝濠の水④

松の葉のいくばくは浮く水の面漣過程にてすでに澄みつつ①

松の葉の一葉一葉にきらきらと照りし夕日も沈みはてにき⑤

(現代短歌大系)

松の葉のうへふに散りたる凌霄花のうつろふ朱をしばしとどめな

①

松の葉の上にかかれる青空をまたなきものと思ひけるかな

松の葉の末のあからにおしなべて雪にやけたる山形秋田県

松の葉のさやかにかくこぼれつつ浅き潮を鹿歩りゆく

松の葉のしげみにあかく入日さし松かさに似て啼ける山雀

中村美穂	高橋英子	吉田正俊	清水信	岡崎義恵	岡崎義恵	中邨秋香	吉植庄亮	小宮良太郎	吉植庄亮	太田水穂	寺門一郎	尾山篤二郎	田中四郎	三木羅風	吉植庄亮	山下陸奥	若山牧水
------	------	------	-----	------	------	------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------